

鬼と仏と

住友を破壊した男・伊庭貞剛

江上 剛

第一回

プロローグ

三井住友銀行の広報部員森田隆志は部長から、取引先に同行してインドネシアへの出張を命じられた。その際、部長が「プロポリンゴに行つてこい。お前にはいい勉強になる」と意味ありげな笑みを浮かべたのである。

プロポリンゴ？

森田にはピンとこない。どこにあるのかも知らない。

「それはどこにあるのですか？」

「バリ島は知っているだろう？ 地理的にはその周辺だな。ジャワ島の東。スラバヤから車で三時間ほどドライブすると美しい森と港

に出会う。そこがプロポリンゴだ。その街の住友林業を訪ねてこい。段取りはつけてあるから心配するな。これからの三井住友銀行の広報を担うお前が、住友の精神を学ぶには絶好の場所だと思う」

森田は、私立の明慶大学めいけいを平成二十四年（二〇一二年）に卒業し、その年に三井住友銀行に入行した。入行五年目の最若手広報部員だ。入行時の配属は都内の大規模店虎ノ門支店。そこで銀行員としての基礎を習い、去年、平成二十八年（二〇一六年）に広報部へ異動となった。

広報と広告の区別もつかなかったが、新聞やテレビなどマスコミを担当し、訳の分からないまま突っ走ってきている。

「住友の精神って……。私、三井住友銀行の入行ですが」

「そんなことは百も承知だ。合併すると、旧銀行へのこだわりを捨てようと、お互いの歴史を消したがる。それは間違いだ」

三井住友銀行は、平成十三年（二〇〇一年）に住友グループの住友銀行と三井グループのさくら銀行（旧太陽神戸三井銀行）が合併して誕生した。当時、旧財閥の壁を越えたと大きな話題となった。

「間違いですか？」

部長の断定的な言い方に驚く。

「それぞれの銀行には、それぞれに数百年の歴史がある。先人たちの思いがある。それを受け継いでこそ、新しい歴史の担い手になれる

るんだ。私は、そう確信している。だから森田に今回は住友の精神を学んで欲しい。次の機会に三井の精神を学び、お前の中で本物の三井住友の精神を築いてくれればいいと思っっている」

部長の強い思いが、空気を圧するように伝わって来る。

「そのプロポリンゴという街に行けば、住友の精神が学べるというのですか」

森田は、ややたじろぎ気味に聞いた。

「学べるというより体全身で感じられる。私もそうだったから、きつとお前も同じだろう。案ずるより産むが易^{やす}しだ。とりあえず行つてこい」

部長に強く背中を押されてインドネシアに旅立った。ジャカルタで取引先とのいくつかの商談をこなした後、別れて一人で格安航空LCCでスラバヤに飛んだ。

飛行時間は約一時間。航空運賃は邦貨換算七千円ほど。

プロポリンゴ……。面白い響きだ。可憐^{かれん}さを感じさせる名前。その街では住友の精神が全身で感じられると部長は言う。いったい何があるというのだろうか。

スラバヤに着いた。空港には、住友林業の渡里裕也^{わたりゆうや}総務部長が迎えに来てくれていた。

渡里が用意してくれた自動車に乗り込む。

「ここから三時間ほどのドライブです。お疲れでしょうから後ろでお休みください」

助手席に座った渡里が言った。

「お名刺を拝見しましたらK T Iとなっていますが、住友林業ではないんですか」

森田は聞いた。

「この会社は、ボルネオのクタイ王国の末裔まつえいの人と一九七〇年に作った合弁企業なのです。K T Iはクタイ・ティンバー・インドネシアの略です。クタイ材木株式会社ってところですね。今ではクタイ王国の末裔は株を売却しまして、九九・九%住友林業の会社なのですが、名前はそのままなんです。住友は、戦前から南洋材を日本に送るためにインドネシアで事業をしていましたが、森林伐採権をクタイ王国の末裔から提供されました」

「戦前からですか？」

「ラワンや黒檀こくたん、紫檀したんなどという南洋材を伐採し、日本へ輸出していたのです」

車は、未舗装の赤土の道を走る。道路は狭く、左右から森が迫ってくる。時々、開けた場所に出て来ると、粗末な草の葉で屋根を葺ふいた家がある。その周りで日焼けした子どもたちが遊んでいる。ワールンと呼ばれる小さな雑貨屋がある。日常の買い物はここで済ませ

ているのだろう。ジャカルタで見た近代的なショッピングモールが夢か幻のようだ。経済発展から取り残されたような貧しさが胸に痛い。しかし、森田の視線の先には子どもたちの屈託くつたくのない笑顔がある。

「森田さん、着きましたよ」

渡里の声で、目が覚めた。いつの間にか眠っていたようだ。

潮の匂いが鼻をくすぐる。窓を大きく開けた。港だ。漁船やヨットが停泊している。沖合には、大きな貨物船も見える。漁師の家なのだろうか。鰺あじのような小魚を干している。日本の漁港のような、どこことなく懐かしさを感じる景色だ。

「街路樹も整備されていてきれいな街ですね」

「素敵でしょう。インドネシアで最もきれいな街の一つに選ばれているんです。ところで、この街の市長は住友林業の元社員なのですよ」

渡里が得意げに言う。

「本当ですか？」

森田は驚いた。

「人口二〇万人の街ですが、住友林業はここで三六〇〇人も雇用しています。三代、四代と住友林業で働いている人がいるんです。さあ、会社に到着です」

玄関先には合板工場の責任者の浅見武彦合板部長、そして植林担当の藤本耕介部長が迎えてくれていた。

浅見は工場内を案内しながらK T Iの業務内容を説明する。

それによると、ここでは地元の木材を無駄なく利用するためにパ
ーテイクルボードと呼ばれる合板を作り、日本へ輸出するばかりで
はなく、インドネシア国内でも多く販売しているという。

森田は、少し焦っていた。説明を受けても、それは通常の事業説
明だ。いったいこの会社のどこに住友の精神があるというのか。理
解できない。

「では、工場の説明はこれくらいにして藤本部長と交代します。一
緒にK T Iの集会場に案内してもらってください」

浅見の傍に藤本が立った。

藤本は植林部長。珍しいポスト名だ。それにK T Iの集会場とは、
いったい何だろうか？

森田は藤本が運転する車に乗り込んだ。

車は港町から離れ、森へと向かって行く。赤土がむき出しになっ
た未舗装の細い道が続く。自動車は、時に大きく揺れる。道路の深
く抉れた轍にタイヤを取られたのだろう。

「あれがK T Iの集会場です」

藤本の指さす方向に、さほど大きくはない白い矩形の建物がある。

その前に白い上衣、黄金色の巻きスカート、白い帽子といういで立ちの顎鬚あごひげを伸ばした老人が立っている。

白い帽子はハッジと言ひ、イスラム教徒の中でメッカ巡礼じゅんれいを果たした者の証あかしらしい。インドネシアはイスラム教徒の国だ。白い服と黄金色の巻きスカートはキアイという正装だという。

車が停まった。森田は車を降りた。

「こちらはこの地区のイスラム教の指導者。パ・ハビブさんです。ここは植林を支えてくださっている協同組合の集会場なのです。会員は一二九六人もいます。ハビブさんはそのリーダーなのです」

藤本がハビブを紹介する。

ハビブは優しく微笑ほほえんで森田に握手を求めた。森田はその手を握り、「初めまして、森田と言ひます」と英語で挨拶あいさつをする。

ハビブが森田を集会場の中に案内する。壁一面に写真パネルが貼られている。その壁に沿って苗木の詰まったケースが置かれている。「私たちは住友林業のお陰で豊かになりました。植林をすることでメッカに行くことができますのです」

ハビブは写真パネルを指さしながら説明する。人々が苗木を植えている様子が写っている。

「これは植林をしている様子ですか？」

森田は、藤本に聞いた。

「私たちは戦前から、この地でラワンなどの天然木を伐採して日本に輸出しています。しかしラワンなどは伐採基準である直径五十七センチ以上の幹に成長するのに三十年から四十年もかかるのです。そんな貴重な天然木を伐採し続けたら、どうなると思われませんか？」

「森は荒れ果てると思います」

森田は深刻な表情で答えた。

「その通りです。そこで私たちはフラルカタという六年から七年で直径二五センチになる木を植林して、それを私たちの技術で天然木と合板にして、天然木の伐採を減らすことにしました。そのフラルカタの植林をハビブさんたち組合員の方々にお願ひしています」

藤本が話し終えると、ハビブが苗木のところに近づいた。

「この苗木を住友林業から無償で提供していただき、私たちは自分の畑に植えています。大きく育ったら、すべて住友林業が買い取ってくれるのです。私たちの合言葉は、木を植えてメツカに行こう、なのです。どうぞこちらへ」

ハビブは森田を外に連れ出し、集会場を取り巻く森に案内した。

藤本が静かに語りだす。

「住友家の家訓には国土報恩というものがあります。会社の利益より国土、地元への利益還元を優先するという考えです。元々、住友林業は住友の祖業^{ベっし}だった別子銅山の林業部門から出発しています。

別子の山々は銅の精錬から排出される亜硫酸ガスの煙害によって、草木も生えないほど荒れ果てていました。近くの農家にも甚大な被害が出たようです。別子銅山では、ほそぼそと植林を続けていたようですが、それでは到底、山は元の緑を回復しません。その時、住友の責任者だったのが伊庭貞剛です」

伊庭貞剛とは「住友中興の祖」とも言われる二代目の住友家総理事だ。森田は名前は聞いたことがあるだけで詳しくは知らない。

「当時は、銅は国家を支える産業でしたから、住友は銅の生産を最優先にしていました。それに対して伊庭貞剛は、住友を破壊しても構わないという覚悟でこの問題に取り組んだのです」

「住友を破壊しても構わないとは凄まじい決意ですね」

「そのお陰で今日まで四百年以上も住友グループが存続しているのです。この成長した木々、豊かな森の姿が住友の精神なのです」

藤本はフラルカタの木を見上げた。

——この森が住友の精神……。

「伊庭貞剛の思いがこのインドネシアにも生きているということなのです」

森田は言った。

木々の間を風が抜けると、葉が揺れ、擦れあう音が、まるで人の囁きのように聞こえる。

森田の耳に、これまで知らなかった伊庭貞剛という男が囁く。

——君たちは、自己の、目先の利益ばかり追っていたら駄目だぞ。

常に社会を考えた経営を為すべきだ。

企業は人間の組織だ。それは成功すればするほど保守的になっていく。成功は、日々、過去になって行く。人は過去に執着し、成功体験を壊すことはできない。その結果、企業は低迷する。成功体験を破壊する強い意志を持って行動しなければ、すぐに陳腐な企業になってしまふ。

プロポリンゴ、この場所に立てば住友の精神が体感できると部長は言ったが、まだまだ十分ではない。それよりも森田は、伊庭貞剛に強く惹かれていくのが分かった。

胸を大きく膨らませて息を吸いこむ。空気が美味い。森を抜けて来る風が頬を撫でる。心地よい感触だ。ここが熱帯のインドネシアだとは到底思えない。ジャカルタ辺りの湿気を多く含み、肌になつとりとまとわりつく空気とは、全く別物だ。爽やかで心までもが軽快になる。

「住友を破壊する覚悟か……」

森田は独りごちた。

伊庭の覚悟の凄まじさは想像もできない。いったいどんな男だったのだろうか……。

第一章 出会い

1

どうして父がいないのか。一緒に遊ぶ友人たちからは、時にお前は父無し子だと言われ、からかわれる時がある。

父はいる。離れて暮らしているだけだ。そう友人たちに反論する。しかし腹立たしく悔しい思いが消えることはない。

母田鶴たづに父の不在を問た質すと、お父様は、ご立派な方でお忙しいのでなかなか御目通りが叶わないのだ、その内に、その内と言い、寂しそうな顔をする。その顔を見ると、それ以上、父のことを話題たにしてはならないという気になる。

父伊庭貞隆さだたかは、母の話では非常に真面目で厳格な人のようだ。

近江国おうみ（滋賀県）蒲生郡西宿村がもうにしじゆくに住んでいる。

貞剛が暮らす母の実家である近江国野洲郡八夫村やすやぶから北東の方角にある。それほど離れているわけではない。歩いて行くことができる距離である。

なぜ父母は離れて暮らしているのだろうか。母は頻繁に父の住まいを掃除するために通っている。それならば一緒に暮らせばいいで

はないか。

離れている理由は判然としない。母は、自分を懐妊かいにんしている時に父の怒りに触れ、実家に帰されてしまったらしい。だから貞剛は、この八夫村で生まれ、七歳になった。

今も母は、じつと父の怒りが収まるのを待っている。

ひどい話だ。極めて理不尽だ。いくらなんでも怒りに任せて自分の子どもがお腹にいるのに母を追い出すことはないだろう。

この間、父には何回か会ったことがある。母に連れられて会いに行ったからだ。

父はいつも気難しい顔をしていて近づきがたい。決して頭を撫なでたり、小遣こづかいをくれたりすることはない。可愛かわいがってもらったという記憶はない。

貞剛の成長を確認するように、上から下までじつとなめるように見つめる。そして庭の木の傍に立つように言われ、その木と背比べをさせられる。

時には「ちゃんと学んでいるか」と聞かれることがある。「はい」と答えると、その時だけは相好あいきょうを崩して「そうか、そうか」と嬉しそうにする。

母は、その様子を見るときもなく見ながら、書き物で乱雑になった父の部屋を片付けていた。

父はいったいどういう人なのだろう。どうして母と自分を他の家族のように身近においてくれないのだろう。いつになったら一緒に住む許しが出るのだろうか。もっと父といろいろなことを話してみたい。

父は癩癩かんしやく持ちだというが、癩癩とは怒りが抑えきれなくなることだ。

自分も父の遺伝子を継いでいるから癩癩持ちということになるのだろうか。

貞剛は違うと思っていた。父の振る舞いの理不尽さに怒りが爆発しそうになるが、母の我慢強さを見ると、自分を抑えねばならないと思う。

癩癩持ちの父と我慢強い母、自分はどちらの資質を強く受け継いでいるのだろうか。

「湖を見てまいります」

貞剛は、気分が滅入めいった時、一人で琵琶湖びわこを目指す。

友人たちと群れて遊ぶより、一人になって物事を考える方を好む癖がある。

何を考えているか十分に把握はあくできてはいないのだが、でも何かを考えたいと思う時が人にはあるだろう。そういう時は琵琶湖こはんの湖畔に立つことにしている。

湖から吹いて来る風に全身を委ね、風にそよぎ、岸に打ち寄せて来る波を見ていると、鳥にも魚にもなったような気がして、心が解放され、自由になる。

八夫村は、琵琶湖の南に位置し、江南と言われる地域だ。

家から外に出ると、地平線まで稲田が広がっている。

稲は緑の葉を伸ばしている。太陽の光をとにかくたくさん浴びようと必死で空に向かって葉を伸ばしている。緑の海が琵琶湖までずっと続く。

秋になると、稲穂がたわわに実り、黄色く色づく。満月の夜、月光に照らされて揺れる稲穂ほど美しいものはない。まさに黄金の波だ。いつまでも見ていたいという気になり、いつしかその美しさに涙が流れることさえある。

田園の緑の中の道を家から南西の方角に歩くと、野洲川の流れに当たる。野洲川は近江太郎の異名を持つ。鈴鹿山系に降り注いだ雨を集めて琵琶湖へ流れ込む大型河川である。

川の土手を北西に真つすぐ歩く。やがて松林の向こうに光を浴びて輝く湖が姿を現す。

湖岸に降りて行き、浜辺に腰を下ろす。大きく息を吸い、そして吐く。湖の気を体内に取り入れる。気が体内を巡り、血を勢いづかせる。気分が高揚し、気宇壮大になる。耳を澄ます。波音が心地よ

い音楽を奏でてている。

多くの船が往来しているのが見える。荷物を運ぶ丸子船だ。

琵琶湖は水運の要。北陸地方の産物が北の塩津湊しおつみなとなどから南の

堅田かた、大津湊おおつに運ばれ、陸揚げされる。そこから京都や大阪に運ばれて行く。

人々は湖と共に生きている。自然の恩恵を受け、自然に逆らうことなく、その偉大さにひれ伏すのだ。琵琶湖を眺めていると、自然の偉大さをひしひしと実感する。

周囲の山々に目を転ずると悲しい事実が胸が痛む。山肌が赤茶けているところが目立つことだ。

以前、そこには緑を湛えた木々が茂っていた。人々は薪炭用しんたんに、また家屋を作るために木々を伐採した。さらには湖を利用しそれらの木々を他国へ運び、金に換えた。

木々が伐採され、土がむき出しになった山肌は自然が流す血に染まって赤いのだ。痛々しく、悲しい。

母のことを考える。

母は、野洲の名門北脇家に生まれた。

北脇家は室町幕府の創始者足利尊氏あしかがたかうじに仕え、軍功があつたために野洲郡八夫村の地頭じとうとなった。以来、帰農し、母の父、景瑞けいずいで十数代二百年以上にもなる。

景瑞の弟、すなわち母の叔父、百禄ひやくろくは幼い頃より住友家に仕え、別子銅山の支配人となった。

その縁で母の弟である叔父、幸平さいへいはわずか九歳で伊予国いよ（愛媛県）別子銅山に行き、十一歳から勘定場で働いている。今ではひとかどの重責を担っていると聞いている。

もう一人の景瑞の弟、大叔父将監淡水しやうげんたんすいは、京都の天台宗門跡寺院である曼殊院まんじゆいんなどに呼ばれて四書五経などを講義する学者となっている。

父のことを考える。

伊庭家も名門である。近江源氏の流れをくみ、宇多天皇の子孫である佐々木一族にまで辿たどることができる。

佐々木一族は蒲生郡の佐々木宮の神主を務めていた。この一族の中ちゆうの武将が伊庭邑むらに居住し、伊庭姓となったという。

その後は多くの戦いくさなどがあり、その都度、先祖たちは戦いに明け暮れ、戦国の世に西宿村に居住するに至った。

徳川の治世になり、先祖が仕えていた槍の半蔵こと、渡辺丹後守たんごのかみ守綱もりつなの孫、吉綱よしつなが大坂泉州伯太藩せんしゅうはかた一万三千石の大名となった。

その時、伊庭氏は乞われて代官となり、近江国における藩の飛び地むしゆう（西宿、虫生など五か村三千石）を任され、父貞隆の代にまで及んでいるのである。

今、自分がここにいるのは偶然のことではない。千年もの昔から絶えることなく続く命の流れがあつてこそだ。そう思うと、貞剛は深い感慨に囚とらわれる。

しかしそれは目の前に広がる琵琶湖の存在とは、比ぶべくもないほど小さいのだろう。

この広大な湖は、気が遠くなるほど昔から人々の命の誕生と死を黙って見守りつつ、ここに存在している。

ああ、なんと自然とは偉大なものであるか。それに引き換え人間はいとも小さきものであり、それだからこそ愛おしくもある。

「満溢まんいつを懼おそるれば、すなわち江海の百川に下るを思う」

母に教えてもらった貞観政要じょうがんせいようの十思の一節を思い浮かべる。

北脇家は、学者を輩出はいしゅつするだけに学問に関心が深い。女性である

母も弟たちと一緒に経書などを学んでいる。

母は、幼い頃から貞剛に論語や貞観政要などを読み、聞かせていた。

——人の上に立つ人は、人より低いところにいなければなりません。低ければ、琵琶湖のようにいたるところから川が流れ込み、満々と水をたたえることができます。人は、琵琶湖のようでなければいけないのですよ。

母は貞観政要の言葉の意味を教えた。

いつか父の下に帰る日がくるだろう。その時のために人としての心構えを学んでおかねばならない。

琵琶湖は、今日も静かに波を打っている。遙か昔から変わらずに……。

「早く準備しなさい」

琵琶湖から戻ってくると、母が慌てている。

堅い表情の中にこぼれ落ちるような笑みを浮かべている。

「どうしたのですか？」

「お父様のお許しがでたのです。さあ、西宿に帰ります」

母が荷造りの手を休めずに言う。

ついに父の下で暮らす日が来たのだ。貞剛は、なぜか武者震いが起きた。

2

父貞隆と暮らすようになって気付いたことがある。

父は怖さと優しさという極端な二面性を持ち合わせているということだ。

その怖さは恐怖ではなく、威厳とか厳格さとかに言い換えた方がいい。いわば畏怖だ。

——嘘はいけませんよ、絶対に。

母は父との対面において注意すべきこととして「嘘をつかない」ことを繰り返し言い含めていた。

これは非常に良い忠告だった。父は自らに厳しいだけでなく、不正、不実な行いをする者を徹底的に罰した。とにかく嘘つきが死ぬほど嫌いなのだ。

代官として五か村を統治するにあたって「嘘を許さない」というのを絶対的な信条にしているかのようだ。

不正や不実を働いた者を叱責する声は四方に響き、まさに雷が落ちたかのようなだった。

誰もが二度と嘘をつかない、不正を働かないと誓わざるを得ないのは、この雷への恐れだった。

一方で大いなる優しさを持っていた。

父には、身分により人々を分けるといふ発想はない。武士が一番偉く、農民や商人は下等であるとは全く考えていない。

貧しい人たちに我が家にある米や金を喜捨することを厭わず、農民、町民の子どもたちを自分の子どものように心底可愛がる。

ある時など、薄汚れた着物をきた農民の子どもを膝の上に乗せ、なにやら話を聞かせていた。おおかた桃太郎などの昔話を聞かせていたのだろう。

「庭に盥たらいを持ってこい。そこに湯をはれ」と母に命じた。

何をするのかと思ってみていると、父は垢あかにまみれた子どもを湯に入れ、たわしで熱心に体を洗ってやっているのだ。

他の子どもたちも、「我也洗ってくれ」と父の周りにまわりついた。

「みんな裸になれ」と父は言い、子どもたちに頭から湯を浴びせかけ、一人ずつごしごしとたわしを動かした。父は、この上ないほどの笑顔を見せた。

複雑な思いがした。

これほど子どもが好きなら、どうして自分を七年も手元に置かず八夫村に離れて暮らさせたのだろうか。この疑問への答えは見つからない。

貞剛は、自分も洗ってほしいという思いを我慢した。ただ喜び、はしゃぐ子どもたちを眺めていた。

自分は我慢しなければならぬ立場なのだ。

父も、「お前も裸になれ」とは言わない。それどころか「貞剛、湯が足らんぞ。湯を持ってこい」と命じる。

貞剛は、父の声に促されて、母の沸かす湯を桶に入れ、せつせと盥たらいに注つぎ足す。

父は漢籍の「春秋左氏伝しゆんじゆうさしでん」の言葉を借りて「子を愛すれば、之これ

を教えるに義方ぎほうを以てす」と貞剛に言ったことがある。

その意味するところは、自分の子どもには、ただ可愛いと甘やかすだけではなく義務とか忠義とかを教えねばならないということだろう。

父は、代官として人々の上立つためには、他の人に尽くすという姿勢が必要だと教えている。

他の子どもたちを無条件に可愛がる父の姿に、一抹いちまつの寂しさを感じたのは事実だった。

また父は、屋敷内に私塾を作り、村の子どもたちに読み書きや論語などを教えた。

貞剛も彼らと机を並べて漢籍を学んだ。この時は、父は父ではなく師に変わる。

「子のたまわく、学んで時にこれを習う、またよろこばしからずや。朋ともあり、遠方より来る、また楽しからずや……」

意味は分からなくとも、子どもたちは父の声に合わせて、唱和する。

大きな声を出さないと、父は容赦ようしやなく拳で頭を叩く。

声を出せば、菓子を振る舞う。子どもたちは菓子欲しさに、まるで猛獸もうじゆうのような大声で論語を唱和する。

「お前たち、偉くなるんだぞ。一生懸命、勉強すれば偉くなれるか

らな」

父は子どもたちに学問をする意義を強調した。

「でも先生、百姓は百姓じゃないのか。父ちゃんが百姓に学問なんかいらんと言っていたぞ」

一人の子どもが生意気にも憤慨した顔をしている。

「そんなことはない。学問さえすれば侍にも学者にも医者にもなれるぞ。また百姓でも学問をした百姓は、美味しい米が作れるんじや」

父は、その子の頭を撫でながら優しく微笑む。

子どもたちに、どんな身分であろうとも学問が道を拓くと言いつけさせる。

貞剛は、身分によって人を差別しない。

父と同じ武士の中には、農民が自分の前を横切ったというだけで刀を抜く者もいる。それとは大違いだ。

厳しく畏ろしい父だが、この点は大いに尊敬する。誇らしく思う。

ある日、縁側で庭を眺めながら、父から漢籍の講義を受けていた。

他の子どもはいない。父を独占できるため、いつになく弾んだ気持ちになる。

「北冥に魚あり、その名を鯤となす。鯤の大いさ、その幾千里なるかを知らず。化して鳥となるや、その名を鵬となす。鵬の背、その

幾千里なるかを知らず。怒して飛べば、その翼は垂天の雲のごとし。

この鳥や、海の動くときすなわちまさに南冥なんめいにうつらんとす。南冥とは天池なり」

貞剛は張りのある声で莊子そうしの一節を読む。

「貞剛、想像してみるがよい。鯤となってもその住まう池は小さいのだ。そして鵬になり、空を飛び、海に波濤はとうを起こし、天の池に至り、そこに自分の世界を見つけるのだ。どこまでも大きくなるのだぞ。どこまでも飛んで行っていいのだぞ。行く先には必ず天の池があるから。ただし、間違ったことだけはするな。人の道たがを違えるではないぞ」

父は、思い切り頭を撫でてくれた。ようやく父が自分に目をかけてくれる。嬉しくてたまらない。

「義兄にいさん、久しぶりです」

ひよいと庭先に顔を出したのは、叔父の宰平だ。

小袖こそでに合羽かっぱ、博多帯ももひきを締め、股引ももひき、紺きんの脚絆きゃはん、紺きんの足袋たび、草鞋わらじに脇差わきざし。肩には振り分け荷物をかける旅姿だ。

「どうした。江戸にでも行くのか？」

父が聞いた。

叔父の宰平をこのような間近で見るのは初めてのことだ。

宰平は、母田鶴の弟で、文政十一年（一八二八年）に野洲郡八夫村の北脇家で生まれた。

九歳の時、母の父、貞剛の祖父景瑞の弟、北脇治右衛門百禄が別子銅山の支配人をしていて関係で別子銅山に行くことになった。

宰平は、銅山役人などから教えを乞い、独学し、学問を修め、たった十一歳で勘定場という銅山経営の中枢で働いていた。

宰平の出世は、姉である母の自慢の一つでもあったのである。

宰平は、今までも母のところに時々、顔を出していたことがあるようだが、貞剛は、挨拶を交わした記憶が定かではない。

貞剛とは十九歳も年が離れている。直接、口を利くには宰平はあまりにも大人であった。

その上、母の自慢の叔父であり、貞剛にとっては尊敬の対象となっていた。

貞剛は、父の傍で、居住まいを正して宰平を見つめる。

さほど大きな体格ではないが、筋肉質でがっしりしている。広い額。太い眉。堅固な強い意志を感じさせる目。

宰平の全身から発せられる強い力に貞剛は、圧倒される思いがした。

「京都に用があまりまして。ついでに寄らせていただきました」

「田鶴に旅支度を解かせよう。今日は、うちでゆっくりできるのだろっ」

「いえ、ちょっと姉と義兄さんの顔を見たら、大阪に帰らねばなり

ません」

幸平は、荷物を肩から下ろし、「よろしいですか」と商人らしく辞を低くして断りを入れると、縁に腰を下ろした。

「田鶴、田鶴、お茶を持ってこい。いや、酒の方がいいかな」

父は、飲む相手ができた嬉しさに顔をほころばせた。

「茶で結構です」幸平は言いつつ、少し考えるようにして「では一杯だけいただきますか」と笑みを浮かべた。

「そうでなくてはいかん。田鶴、酒を持って来なさい」

父は大きな声で奥にいる母に言った。母が、「はい」と返事を返すのが聞こえた。

縁側に腰を下ろし、庭を眺めながら、父と幸平が杯さかずきを交わしている。

貞剛は、正座したまま二人の話に耳を傾ける。

「なんだか世の中が騒がしくなって参りました。江戸はもとより、京、大阪もざわついております」

幸平は杯を傾けながら言った。

一八五三年（嘉永六年）七月八日、アメリカ大統領の親書を持ってペリーが浦賀に来航し、江戸湾内に軍艦を進出させた。

同年八月二十二日、ロシアのプチャーチン率いるロシア艦隊が長崎に来航した。

アメリカ、ロシアとも日本に鎖国政策の廃止を迫っていた。

「泰平の眠りを覚ます上喜撰じょうきせんたった四杯しはいで夜も眠れず、とか狂歌が流行はやっているようだ。世の中は大きく変わるかもしれないのよ」

父は杯をくいと干した。

貞剛は、すぐに父の杯に酒を注ぐ。

「義兄さんは代官ですから、何か今般のこの情報はございますか」
「特にはない。しかし、今後、諸外国が我が国に開国を迫るのは、もっと激しくなるだろう。老中阿部様が奔走ほんそうされておるが、ご苦労されておるようだ。今までは幕府の一言で物事が決していたが、それもならず、諸大名の方々にご相談されるため、船頭多くして船、山に登るといふ諺ことわざの如く混乱し、道が定まらん。我が藩主渡辺様にも開国か鎖国かのご下問があつたようだな」

老中阿部正弘まさひろは福山藩主で若くして老中首座となり、諸外国からの開国要請に対処するため、旗本のみならず外様大名とさまらにも意見を求めたため、幕府の権威を落としてしまった。

「私どもは、オランダなどと銅の交易をやっておりますが、開国し、もっと自由に外国と商売がやれるようになれば住友家も楽になるのではないかと密かに思っております」

「別子の景気は良くないのか？」

父の問いかけに、幸平は、悲し気に視線を落とした。

別子銅山は住友家の要の事業である。

「別子が開坑しました元禄の頃は、二百万斤(千二百トン)を超える銅を産出しておりました。しかしその後はだんだんと減少いたしました。

遠町深鋪えんちようふかじきが原因です」

「それはなんの意味ですか？」

思わず質問を發してしまった。

聞いたことがない言葉に興味を覚えたのだ。

幸平が、思いがけないという表情で貞剛を見た。

「貞剛、そなた、別子の話に興味があるのか？」

幸平が意外だという表情をした。

「はい。叔父さんがご出世されていると、母から聞いていたものですから。その遠町深鋪とはなんでございますか？」

まっすぐに幸平に視線を合わせた。

「義兄さん、貞剛はいい目をしていますね。しっかりしている。頼

もしい奴だ」

幸平は、筋張った掌てのひらを広げると、貞剛の頭を掴み、揉みくしゃに撫でた。

その瞬間、頭の中から足先に電流が流れるような感覚を味わった。嬉しくてたまらない。尊敬する幸平に関心を持つてもらえたことが

喜びとなった。

幸平は、「遠町深鋪とはな」と説明を始めた。

別子銅山は、海拔千二百メートル以上の高山にある。そのため銅山へは延々と道が続いているのだが、そこを薪炭や食料など必要なものを運ばねばならない。そのためにコストが膨大にかかってしまう。これが遠町。

坑道を鋪しきというが、銅を求めて掘り進めると、どんどん深くなつていく。七百メートル、八百メートルもの深さになると、水が噴き出て、それを汲み上げないことにはそれ以上掘り進めることができない。当然に産出量は落ちていく。また深くなっていく鋪が、コストを増大させる。これが深鋪。

このコスト増大要因の遠町深鋪をなんとかしなければ、銅山経営は危機ひんに瀕ひんすることになる。

「なかなかたいへんだのう」
父が同情するように言った。

「はい。産出量が減少して幕府の銅座に納める御用銅の七十二万斤（四百三十二トン）もなかなか満たすことはできません。御用銅を超える分は地売銅として御用銅より一・二両ほど高く買い上げてもらえるのですが、上手く行きません」

御用銅は輸出用、地売銅は国内販売用だ。

「なんとかなるのか」

「源兵衛殿が経営に復帰されて、土地や建物の売却を進めたり、御用銅の減少などを幕府と強く交渉したりとご奮闘されております」

幸平は言い、杯を干した。

たかわら

鷹藁源兵衛は本店支配役を務めていたが、経営改革で当主と対立し、隠居させられていた。しかし、いよいよ住友の経営が厳しくなり、一八五三年（嘉永六年）に「補助役」として経営の中心に復帰していた。

「はいはい、鮒ふなずしですよ」

母が、幸平の好物である鮒ずしを運んできた。

「ありがとうございます。姉さんの鮒ずしを食べれば、元気が出ます」

幸平は皿に盛られた鮒ずしを勢いよく食べ、満足そうに目を細めた。

「貞剛、幾つになった」

突然、幸平が貞剛に聞いた。大きな目が、貞剛を飲み込んでしまっている。いそうだ。

「七歳です」

貞剛は幸平を睨むように見つめた。

「将来は何になる。伊庭家の長男なら義兄さんの跡を継いで代官か。それとも私と同じ北脇の血が流れているなら商人か学者か」

「まだ何も決めていません」

「そうか……。別子に來い。面白いぞ」

「でも今のお話ですと銅山は芳かんばしくないんでしょう」

生意氣にも聞いた。

「そんなことはない。私がなんとかしてみせる。なにせ別子で作る銅は日本の国を支えているんだからな。お山は、宝の山であり、神の山だ。何千人という人が、お国のために少しでも良い銅を掘ろうと頑張っている。別子が駄目になれば、日本が駄目になる」

宰平は、自信に溢れた笑みを浮かべた。

この人ならなんとかするだろうと、幼い貞剛ならずとも思う不敵さだ。

「私も見学できるでしょうか？」

貞剛は聞いた。

宰平は、それを聞くと、曇り空が晴れたような明るい表情になり、「おお、いつでも來い。案内してやるぞ」と、また大きな手で貞剛の頭を揉むように撫でた。

宰平は、振り分け荷物を担ぎ、合羽をまとうと、立ち上がった。

「すっかりご馳走になりました。これで失礼します」

宰平は頭を下げた。

「また寄ってくれ」

父が言った。

「次はゆっくりするのよ」

母が言った。

「次に来るときまでには別子の経営を軌道に乗せておきます。その時はゆっくりとさせてもらいます。それまではお預けです」

幸平は力強く言った。

そして貞剛を見て、「高いお山で、何千人という人が力を合わせて働いているぞ。その姿を見に来い。きっと勉強になる」と握手をするべく手を差し出した。

貞剛はその手を握った。幸平も握り返した。

強い力だ。その手からどくどくと勢いよく血が流れるのを感じる。その血が貞剛の体に流れ込んでくる。同時に幸平の魂も入って来る。不思議な感覚だ。

——この人とは同じ血が流れているのだ。

貞剛は、幸平の大きな目を見つめながら、思った。

〈つづく〉